

頭取の権力

清水一行



徳間文庫

徳間文庫



とうどり けんりよく
頭取の権力

© Ikkô Shimizu 1992

し - 3 - 39

1992年1月15日 初刷

著者 清水一行

発行者 荒井 修

東京都港区新橋四一〇一〇五

発行所 株式会社徳間書店

電話(〇三)三四三三・六二三一(大代)
振替 東京四一四四三九二番

印刷

凸版印刷株式会社

製本

編集担当 吉川和利

ISBN4-19-599444-6 (乱丁、落丁本はお取りかえいたします)

徳 間 文 庫

頭 取 の 権 力

清 水 一 行



目次

一章	財界幼稚園	5
二章	権力者の臍 ^{へそ}	66
三章	サイコロの目	120
四章	神経同志会	184
五章	独裁者の手	256
六章	孤独な日	313
解説	郷原 宏	345

一章 財界幼稚園

1

宗右衛門町の賑やかな通りを、道頓堀川とは逆な玉屋町側へ路地を少し入ると、いかにも野暮くさく映る紫色の、スナックへしべりやの看板が目飛び込んでくる。

十一月も今日明日の二日間だから、三日経つと師走であった。

師走と言っても例年のことで、気持ちのあわただしさとか繁華街の喧噪には、格別な変化はなかった。ミナミの街を彩る光の交差は、昔もいまも道頓堀川に揺れて泳ぐように映り、川を越えた遙かな難波球場の上空に、雲を赤く焦がしていた。

合板の安物のドアを開けて入ると、カウンターのほかに四人掛けのボックス席が二つしかないへしべりやは、どうして店の名前がへしべりやなのか、果してあのシベリヤのことなのかどうか、店内の飾り付けからは店の名前の由来をうかがい知ることはできなかった。

むしろ格別な飾りもなにもなかったし、店内の照明も特に工夫が凝らしてあるわけでもなく、宗右衛門町^{かいわい}界隈の華やかなスナック街では、かなり見劣りのする六坪ほどの小さな店だった。

店内の客は、カウンターにビジネスマン風な二人連れと、奥のボックス席に三人が、三十六歳になるママの恒子^{つねこ}を交えて、賑^{にぎ}やかな酒を楽しんでいた。

「いや、それでやな。たまにはうどんでもと思って、そしたらちょうどエレベーターに乗っていた四人の女子行員が、やはりお昼を食べに行くというわけだ。そんなら一緒にいこやないかと、腕こそ組まなんだが肩を並べていそいそと、そんな感じやったな」

六十歳の半ばといった半白な髪のがっしりした男が、含んでいた笑いを飲みこむように、濃い目の水割りに口をつけた。

「え、頭取が女子行員と一緒にですか？」

「おかしいことないやろ」

「いえ、女子行員が困ったでしょう」

「そうか。そういうこともあるわけやな。けどご存知^{ぞんじ}の通り、こっちは生来鈍感なものやから、そこまでは気がつかなかった」

「頭取さんたら……」

生来鈍感だと言った言葉に、ママの恒子が顔をしかめた。

頭取……と呼ばれているのは、大阪に本店を構える大手都市銀行の一つ、西阪銀行頭取中田

太郎で今年六十五歳。

連れの二人はいずれも中田の部下というより、西阪銀行の幹部で、几帳面きちょうめんな感じの一人が専務の川村直巳、もう一人は人事部長の豊田昌洋。川村専務は西阪銀行で中田頭取派の旗頭。大正十二年生まれだったから、頭取の中田より七つ年下である。またちょうど五十歳になる豊田人事部長は、一七九センチと背が高く、中田頭取派事務局長という立場であった。二人とも言うならば中田頭取にとっては、腹心中の腹心である。

「それでどうなさいました」

三人の客のなかでは一番若い人事部長の豊田が、中田に話の続きをうながした。

「うん。銀行を出て通りを右へ行くと、なんたらいう外食産業があったやないか。初めてやったな。ああいうアメリカナイズされた、若い人たちの行く店へ入ったのは」

「頭取さんが入っていかはったら、店の従業員がびっくりしたのと違いますか」

「そんなことはないさ。むしろそういう感じの店の方が、わたしのことなど知っている者はいないし、かえって気が楽なくらいや」

「でもねえ……」

恒子が不満そうに言葉を切る。

「それでなにを注文するかいうことになったわけや。すると女子行員はピラフがええと言う。四人ともピラフにしようということになって、わしもそんならおんなじでええやろといった」

「外食産業のピラフでは、あまりおいしくなかったでしょう」

豊田が含み笑いで言う。

「それが問題なんや。わし、ほんまいうとピラフなんたらもの食べたことがないんやからな。それで、ま、なんでもええと思ったが、妙にすかすかなものが出てきても困ると考えた。うどんを食べようと思って会社を出たわけやが、うどんがだめならご飯を少し食べておかんと、夜、家へ帰るまでに腹が減ってせつのうなる。こっちは知らんのやから、ピラフなんていうアマゾンの川魚みたいな名前の食べ物は……」

「頭取さん本当に知らはりませんでしたの」

「知らんかったなア」

「それでどうなさいましたか」

専務の川村も、水割りのグラスを離さずに聞き返した。三人ともまったく気兼ねなしにグラスを空けた。カウンターのなかに二十五、六歳のバーテンが一人と、赤いワンピースを着た背ばかり高い若いホステスが、カウンターの二人の客の相手をしていた。

カウンターの客は静かに話しあいながら飲んでいて、ボックス席の、この界限でもちょっと程度の落ちるスナック……には不釣り合いな、三人の年配客の笑い声が際立っていた。

「どうしたかってそらきまつてる。ライスを付けてくれいうたさ」

「まさか頭取さん」

「本当にそんな注文をされたんですか」

「うん。した……」

「それでどういふことになったの」

「ようわからなかった。四人の女子行員が困ったように顔を伏せあっていたが、ピラフがどんなものか知らんのやからな。わしはライスを注文して悠然と待っておった」

「するとピラフにライスがついて出てきたんですか」

「出てきた。運んできたウェートレスも、やっぱり困ったように顔を赤くしておった。わしも焼飯とそれに白いライスが目の前に並んだものやから、なんと言っているか思わず笑い出してしまった」

「チャーハンに白いご飯ね」

聞き直すというより、わざわざ念を押してから恒子が大袈裟おおげさに身をよじって笑いだし、川村と豊田の二人もどうしようもないという感じで、声を立てて笑った。

もちろん頭取の中田は話の初めから眼めが笑っていた。

「けどな。それはわしが非常識だったのかもしれない。ほんま知らなかったのや。ああいう店へ入ったの初めてなんやからな。それにしても日本では焼飯といい、中国風ではチャーハンとなり、外食産業ではピラフという。一体どないなってるんや」

中田の口調に、席の三人はさらに押さえきれずに笑い声を立てる。

「そういうお人なのよ。頭取さんの世間知らずはいまに始まったことではないけど、ピラフを知らなかったなんてね……」

「そう言われると恥ずかしいな。こっちは昔から頭が悪かったことは確かや」

中田もそう言って笑いで水割りを飲みこんだ。自分から頭が悪かったと、てらいもなく言うてのけるような都市銀行の現役頭取は、後にも先にも中田をおいてほかにはいないはずであった。

そんなくらいだったから、頭取になる前までの中田は、終始一貫営業部第一線の突撃隊長……であった。

数えきれないくらいの支店を歩き、次長で手腕を上げ、いくつもの全国の支店長を歴任し、その都度支店の業績を飛躍させ、西阪銀行営業の中田太郎として、都市銀行の営業戦線では常に一目置かれる存在であった。体当りし全身で動き回って、中田は重役の椅子いすをつかみ、さらに常務に上がり専務に昇格し、まさかと言われていた副頭取から、昭和五十二年の春、西阪銀行の頭取にまでのし上がってしまったのである。

初めから青白いインテリの銀行マンでは絶対になかった。頭脳めいせきの明晰さを競う、エリートのパンカーでももちろんなかったのである。そして中田はそのことを逆な切札にして、周囲の者たちから認められてきたのだった。

認めるといっても、体全体で営業活動にぶつかっていく中田の姿勢を、最大限に評価してく

れた人は実はたった一人――

戦後の西阪銀行中興の祖といわれた、元頭取でいまは亡き染谷武雄であった。戦後の西阪銀行で染谷は天皇とまで呼ばれ、西阪銀行の行員上がりで、なんと二十三年間も頭取の地位を守りつづけたという、圧倒的な実力者だった。

「頭取さん、ちょっとよろしいですか」

「う、なんだ」

ひとしきり笑い、さらに水割りを空けてから、恒子が細い目を伏せるようにして、中田に小さく言った。

女にしては丸味のあまりない骨っぽい体つきで、プロポーションがいいというわけでもない。ありていに言うところ、痩せ型の中年女……。歯並びだけは綺麗だったが、顔が細く目もやはり小さかった。

お世辞にも美人という、恒子にはそういうほめ言葉が通用しなかった。それでも宗右衛門町で、スナックを経営するママらしきとして挙げられるのは、そつのない客あしらいのよさであった。だがそれも、十八歳のときから十八年間も続けてきた、ホステス稼業の習性と言えなくもなかった。

お客を楽しく遊ばせること。

水商売の女としての恒子は、そのことだけを唯一の身上に働いてきた。

「すいませんがちょっとカウンターの方へ、いいでしょうか」

「カウンターか。よしよし行こう」

「お願いします」

恒子がボックス席を先に立ち、水割りのグラスを持った中田が、よいしょという感じで腰を上げ、恒子に続いてカウンターの一番端に座り直した。中田にたいして、恒子はなにか相談でもあるらしい気配である。

ボックス席には川村と豊田の二人が、取り残された感じになった。

「よくわからないんですが……」

人事部長の豊田が川村を上目遣いに見上げ、顔をまったく動かさずに切り出す。カウンターへ移っていった恒子と中田は、おでこをくっつけあうようにしてなにか話をはじめていた。

「わからないって？」

紺の背広を着た川村は、上体をちょっと反り返らせるようにして、鼻筋の通った豊田を見下ろした。

大阪商科大学出身の、蛮カラな感じの中田頭取とは対照的に、川村は東大経済学部出身。中田より十一年遅れて、昭和二十六年の西阪銀行入行である。知的な顔立ちとスマートな身のこなしで、身边にはいつも中田とは対照的というか、正反対なエリートバンカーらしい落ち着いていた雰囲気漂わせていた。

そんな川村の唯一の自己主張は、いつも紺色の背広をきちんと着ているということ。同じ紺色でも縞が入っていたり、濃淡の色調にすこし変化を持たせたりしていたが、紺系統以外の背広には一切袖を通さなかった。

バンカーにとって、年齢とは無関係に紺色こそが派手さを消し、地道で間違いないイメージを訴える保護色だというのが、川村が紺の服しか着ない根拠になっていた。

「以前はあのママ、銀行へもときどきみえていましたね」

「いや、中田さんが頭取になられてからは、銀行へはこの顔を出したりしなくなっているはずだけだね」

「そうですか……」

「だけど誤解しないほうがいいな」

川村は真顔に戻って豊田に言った。

「もともとはどういう人なんですか」

それでも豊田は食い下がる感じで川村に聞いた。時間はやっと午後九時を回ったばかりである。

「なんでも十八歳のときから、水商売をやってきたということだよ。水商売以外のお勤めはしたこともないし、どういうふうにするのか想像がつかないといつも言っている。見てわかる通りそういう感じだろう」

「船場支店から、融資金が出ていましたね」

豊田は川村の整った顔を覗きこんだ。

「どうして知ってるの？……」

川村が思わず聞き返す。

豊田は水割りのグラスを口元に運んだ。有線放送のポピュラー音楽が、店の中に低く流れていた。気を付けなければわからないくらいである。

「ちょっと前に頭取から一言、お聞きしたことがあります」

「頭取にも困るんだよ。身内だと思うとなにもかも明けっ広げにしてしまう」

「すいません……」

「いやいいさ。きみが謝る必要はない。しかしこの店の開店資金は、ぼくが保証人になっているんだ。頭取が保証人を引き受けているわけではないよ」

「しかしそれは」

「頭取はああいう人だし、金銭にも徹底してこだわらない。それはそれで立派なことだとぼくは思っている。だから当然の帰結として、千五百万円なんていう金があるわけがないんだ。頭取はもし千五百万円もの金を持っていたら、銀行からじゃなくて、自分で出してしまったかもしれないけどね」

「すると専務が保証人で、担保提供もなさったんですか」

「担保は頭取の売布めふの自宅が入っている」

「それはしかし……。頭取が自宅を担保提供し、専務が保証人というのは、ちょっとすごいですね。船場の支店長は融資決済の印鑑を押すとき、手が震えたんじゃないでしょうか」

「しかしもう八年近くも前のことだよ。頭取が常務から専務に昇格される直前、ぼくもまだ単なる部長だった」

川村は目を細め、なにかを懐かしむような口調で言った。カウンターへ移った恒子と頭取の中田は、まだ話しあいをしていた。

「残債は？」

「もうたいしたことはないはずだな。あっても百万か二百万円じゃないの」

「それなら問題がありませんね。ただわたしたちにはちょっと……」

人事部長の豊田は言葉を濁し、もう一度カウンターの中田のほうへ視線を投げた。

「なにが？……」

川村はわざとらしく聞き返した。

「え、いえ。しかし頭取の趣味なんでしょうか」

豊田が聞きづらそうに言った。

「彼女のスポンサーかどうかと聞きたいわけだな。あの通り気だてのいいママではあるけど、正直言ってセックスアピールもあるとは思えないし、まして美人でも、魅力ある女性というの